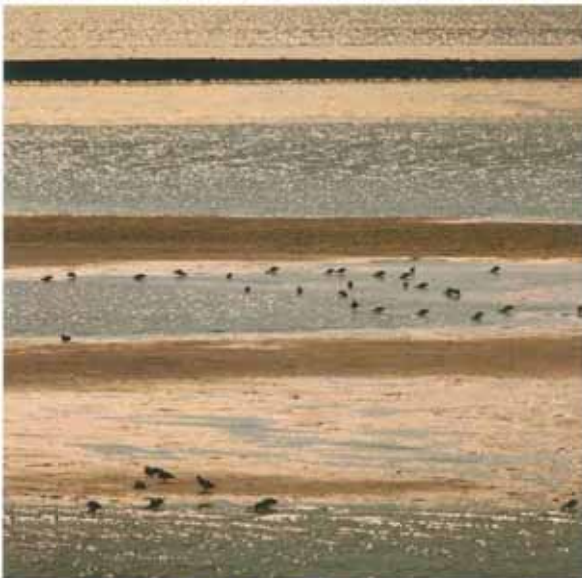
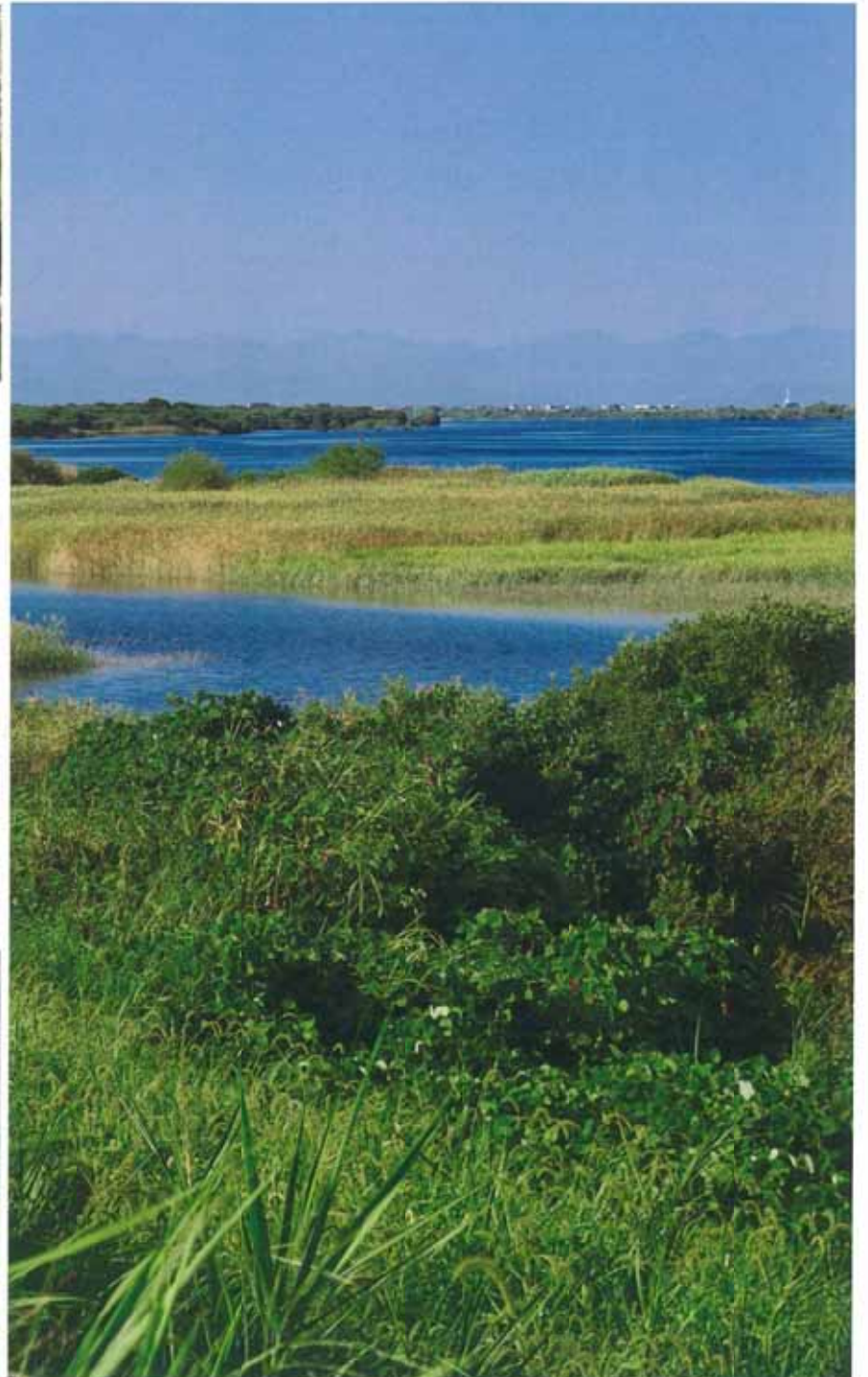


「第4回愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会」における蔵治委員からの御質問に対する回答

御 質 問	回 答
<p>丹羽さんがいるつもりでお聞きしますけれども、ご説明大変良く解りまして、とても大変なことに取り組まれているなということは思いましたが、分断され移動出来なくなったということがあって、繋がりをまた取り戻そうということだったと思います。分断され移動出来なくなった土地というお話だったと理解しておりますけれども、土地というのも非常に重要ですが、一方で河川というものも考えなければいけない。自然環境として河川というものがあります。河川もまさに分断され移動出来なくなったというのが、我々の利便性のためにこれまでしてきたことですが、ここでもやはり同様のネットワークというか河川の繋がりを取り戻すという取組を自然環境課さんなり、或いは愛知県の他の部局なりで行うことは、まさにCOP10のターゲットの具現化と位置付けられると思うんですけど、そういうご説明が無かったわけですね。ですので、そういうことが既に何か行われている事例があるかということと、あとは村上先生の資料3のペーパーには開門調査を愛知ターゲットの具現化と位置付け取組を検討すると書いてあるんですが、今、愛知県の環境部において、こういう位置付けはされてないということなのかどうかという事実関係と、もしそれがされてないのであれば、それをすることが出来ない困難とか障害はどんなことにあるのか、というようなことを聞こうかと思ったんですが、大変残念なことにタイミングを逸してしまいましたので、後日何らかの形で回答をいただければと思います。</p>	<p>【河川の生態系ネットワーク形成の取組について】</p> <p>あいちの生物多様性ポテンシャルマップ(別添資料参照)では、指標種として「あゆ・ウナギ」を採りあげ、海と連続し、遡上が可能と考えられる河川区間と、遡上を障害すると考えられる堰・ダムを表示しています。</p> <p>今後、生態系ネットワークの形成を進めていく中で、堰の必要性が失われている場合には撤去の是非も含め検討するよう設置者に依頼していく考えであります。なお、具体的な事例はまだありません。</p> <p>【「長良川河口堰の開門調査」の愛知目標の具体化としての位置付け等について】</p> <p>位置付けてはおりません。一般的に、公共事業、特に長良川河口堰のような大規模な公共事業では、治水・利水などのプラスの面と環境への影響などといったマイナス面の両方について総合的に勘案されたうえで計画・実施に至っていると認識しております。</p> <p>長良川河口堰の開門調査については、この「愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会」などにおいて、関係者間で、改めて、そのような総合的な検討を行っておられるものと受けとめており、自然環境課としましては、その検討結果を受けまして、「愛知目標の取組としての位置付け」について、考えさせていただきたいと思います。</p> <p>ただ、長良川や長良川河口堰は、愛知県の行政区域内ではありませんので、愛知目標の取組として位置付けていくためには、河川管理者である国土交通省や施設管理者である水資源機構はもとより、直接の行政区域であります三重県や岐阜県の協力が不可欠であります。</p>



Aichi
Biodiversity
Potential Map

あいちの生物多様性ポテンシャル

気づく・まもる・
つなげるマップ

(抜粋)

愛知県
平成22年10月



はじめに

私たち「ひと」は、様々な生きものの一員であり、自然から様々な恩恵を受けて暮らしています。しかし、ひとの営みの規模が拡大するにつれ、知らず知らずのうちに、他の生きもの（すみか）に影響を与え、その結果、絶滅の危機に瀕している生きものが増え続けています。数多くの生きものとそれらが生き続けることができる場所を守ることは、私たち自身の暮らしの基盤を守ることにつながることに気づかなければなりません。

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」は、簡単に言うと、生きものがすみ続けていくことができる場所を示したマップです。

実際に生きものがすんでいる場所のほか、森や草地、水辺などの分布や広さといった環境条件から、生きものすみかとして適している場所を予測して示しました。

もし、このマップのとおり生きものを見つけたら、その生きものがすみ続けるために何が大切なのか考えてください。そして、それを守ってください。

もし、マップのとおり生きものがいなかったら、何かマップでは分からない原因が、その生きものが生きるための条件を壊しているかもしれません。それを、地域の皆さんで相談し協力して直してあげてください。皆さんの暮らし場所に、生きものが戻ってくるはずですよ。

地域の皆さんが力を合わせて「ひと」と生きものが一緒に暮らせるふるさとあいちを作っていきましょう。

あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ 活用の手引き 目次

はじめに.....	1
生態系ネットワークについて.....	3
マップについて.....	4
マップに示されている内容	4
生態系ネットワークの「指標種」	5
マップの構成	8
マップの活用.....	9
マップを活用する機会	9
マップを活用する際の基本的な手順	9
マップ活用シート.....	10

ひとと生きものも、自然の恵みに支えられている

あいちに暮らし、働き、学ぶ私たちは、奥山から里地・里山、田園、都市、沿岸に至る、変化に富んだ自然に囲まれています。こうした変化に富んだ自然環境は多様な生きものを育み、豊かな生物多様性の基盤になっています。

あいちをはじめ伊勢湾を取り囲む地域には、約500万年以上前から、木曾三川が運搬した砂礫や粘土の堆積によって作られた丘陵地が連なっています。湧き水が出るような赤土斜面の谷間や丘陵地に湿地や湿原が点在し、そこには「東海丘陵要素植物群」と呼ばれる植物群（シデコブシ、シラタマホシクサなど）や、我が国最小のトンボであるハッチョウトンボやヒメタイコウチなどの貴重な動植物が今もひっそりと生きています。

このような特徴的な自然環境はまた、伝統的にモノづくりの地であるこの地域の産業の糧となり、暮らしを支えてきました。陶磁器や醸造、機械、木工、繊維、そして全国有数の農業や水産業など、私たちは自然環境を利用し、食料や資源、水などの恵みを受けて、産業を発展させ、暮らしをきたしています。

あいちの生物多様性が迎えている危機

かつて、ひとが自然を利用するために作った「ため池」や「湿田（冬でも湿っている水田）」「土水路（土で作った水路）」、薪や肥料を得るために手が入れられてきたコナラやアベマキなどの「二次林」などの、いわゆる里地・里山は、ひとと生きもの共生する場所でもありました。

ところが、戦後、化石燃料や化成肥料への転換・普及によって、二次林を管理する経済的な理由が失われ、伝統的な里地・里山の管理は行われなくなりました。また、山地における人工林の拡大、丘陵地や平野における都市域の拡大、河川や水路・ため池・海岸のコンクリート化、海の埋め立てなどが進み、生きもの生息・生育空間は急速に失われていきました。

そのため多くの生きものが減少し、その結果、県内の絶滅のおそれのある野生の生きもの現状を示す『レッドデータブックあいち2009』には1,208種が掲載される状況になっています。『第一次レッドデータブックあいち』（2001、2002年）と比べると、244種で絶滅の危険性が増加方向に変更され、絶滅のおそれがある種（絶滅危惧Ⅰ、Ⅱ類）は、植物480種（植物全体の約18%）、動物275種（動物全体の3%）、合わせて755種（全体の6%）にも上っています。